和田廃寺 SD145 出土古式土師器について

1　はじめに

和田廃寺は橿原市和田町字トノンダ一帯に所在する。現在確認できる伽藍の痕跡は、水田中に残る塔基壇と礎石の一部のみであるが、発掘調査では多数の掘立柱建物や掘立柱塀、溝、暗渠などを検出している（『藤原概報 5』『同 6』）。寺院の創建年代は、出土軒瓦の分析から７世紀前半と考えられている。

今回報告する土器は、1974年度に実施した和田廃寺第１次調査の溝SD145から出土した古式土師器である。完形土器を含む良好な資料であるが、概報では文章のみの報告にとどまる（『藤原概報 5』）。また、一部の土器の紹介がなされているが、その詳細は未公表であった[1)]。

土器は、布留式古段階に属し、壺形土器・甕形土器・高杯形土器のほか、小型精製三種の成立に関わる小型器種を多く含む。これらの資料は奈良盆地南部における当該期の土器様相を知る上で貴重であり、その重要性を鑑み、整理作業を進めてきた。今回はその成果を報告する。

2　遺　　構

SD145は第１次調査区の北端で確認された素掘溝である。調査区東北隅から西13～28mの範囲は、東で南に振れる幅1.6～1.7mの東西方向の溝であるが、そこから東では蛇行し、調査区東壁では幅７mほどに広がる。深さは50～70cmで、埋土は暗灰褐色粘土および灰褐色粘土である。

図160には今回報告する土器の出土地区を示した。SD145から出土したことが確実な資料52点のうち、約８

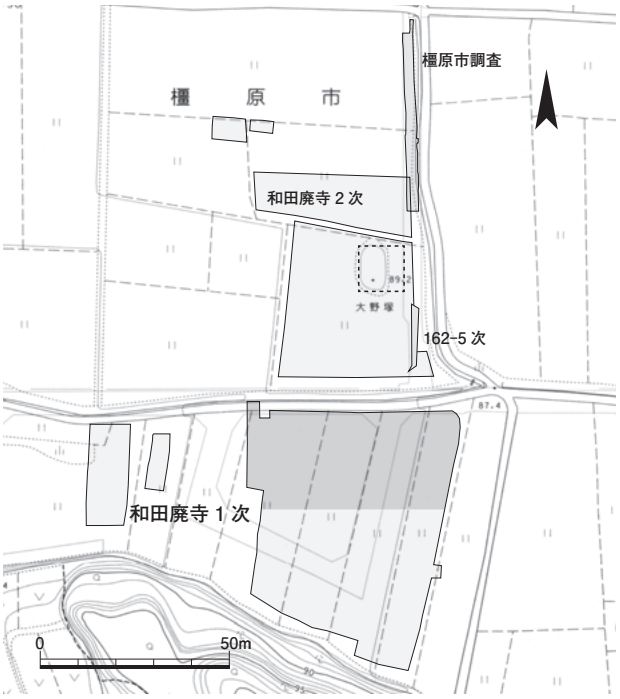

図158　調査区位置図　1：2000（濃いトーンの部分が図159の範囲）

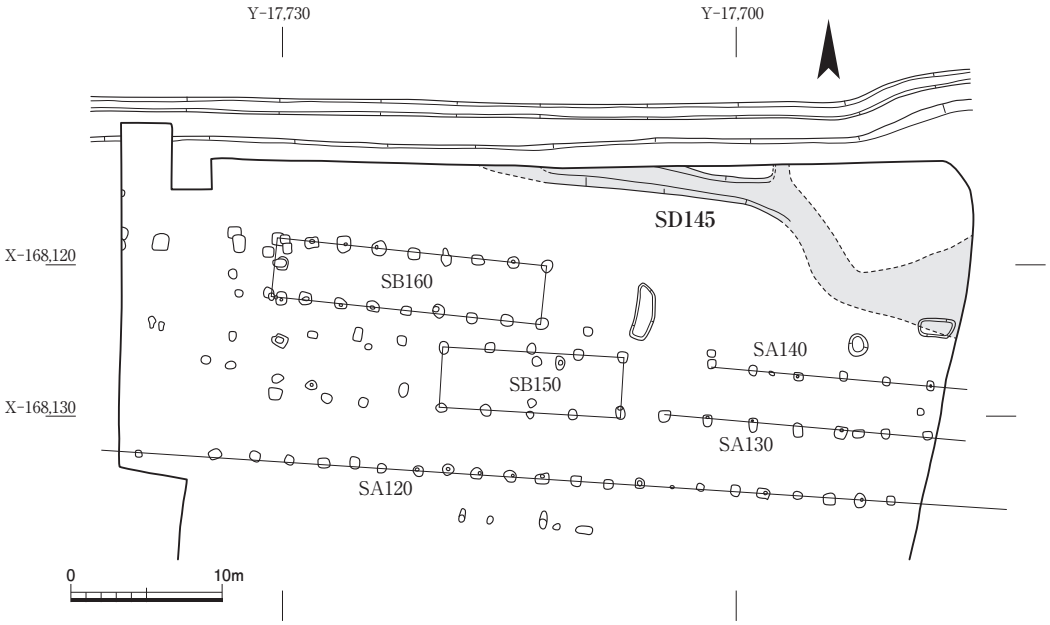

図159　第１次調査区北半遺構図　1：500

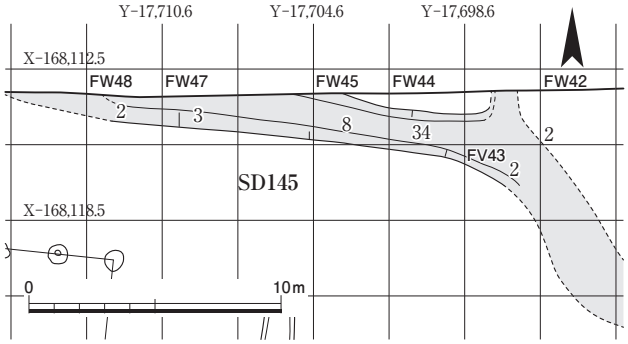

図160　SD145土器出土地区・点数　1：300
（図中のグリッドは３m四方。左上はグリッド番号。）

割にあたる42点がY=－17,704.6～－17,698.6の東西６ｍの範囲から出土しており、当土器群はまとめて廃棄された可能性が高い。また、溝埋土は短期間に埋められた状況を呈しており、SD145出土土器群の一括性は高いと判断できる。なお、52点（図161～163の１～52）の出土地区は、33・51がFV43、13・37がFW42、３・６・８・19・28・38・40・43がFW45、47～49がFW47、２・42がFW48で、36は不明。それ以外の34点はFW44から出土した（各グリッドの位置は図160に示す）。　**（若杉智宏）**

３　出土土器

SD145からは、整理木箱12箱分の土器が出土している。今回、出土位置があきらかな個体を中心に図化をおこなった（図161～163）。なお、SD145からの出土があきらかな個体52点以外にも、SD145延長部付近の排水溝掘削時に出土した２点（53・56）と、注記が不明であるが関連が想定できる２点（54・55）についても参考資料として掲載した。以下、器種ごとに内容を記述する。

壺形土器　壺形土器には、直口壺が存在する（１～５・53）。法量から概ね小型品（３）、中型品（１・２・４・53）、大型品（５）に区分される。

１～４は体部外面に細筋横方向のヘラミガキを施すもので、「精製器種Ｂ群」[2]とされる庄内式期以降に新たに出現する製作技術体系による（以下、「Ｂ系統」とする）。胎土については精製されたもの（３・４）が典型品として挙げられる。なお、１～３は、外面にススが付着し、火にかけられている。

５については、下半部に体部最大径が位置し、底部は

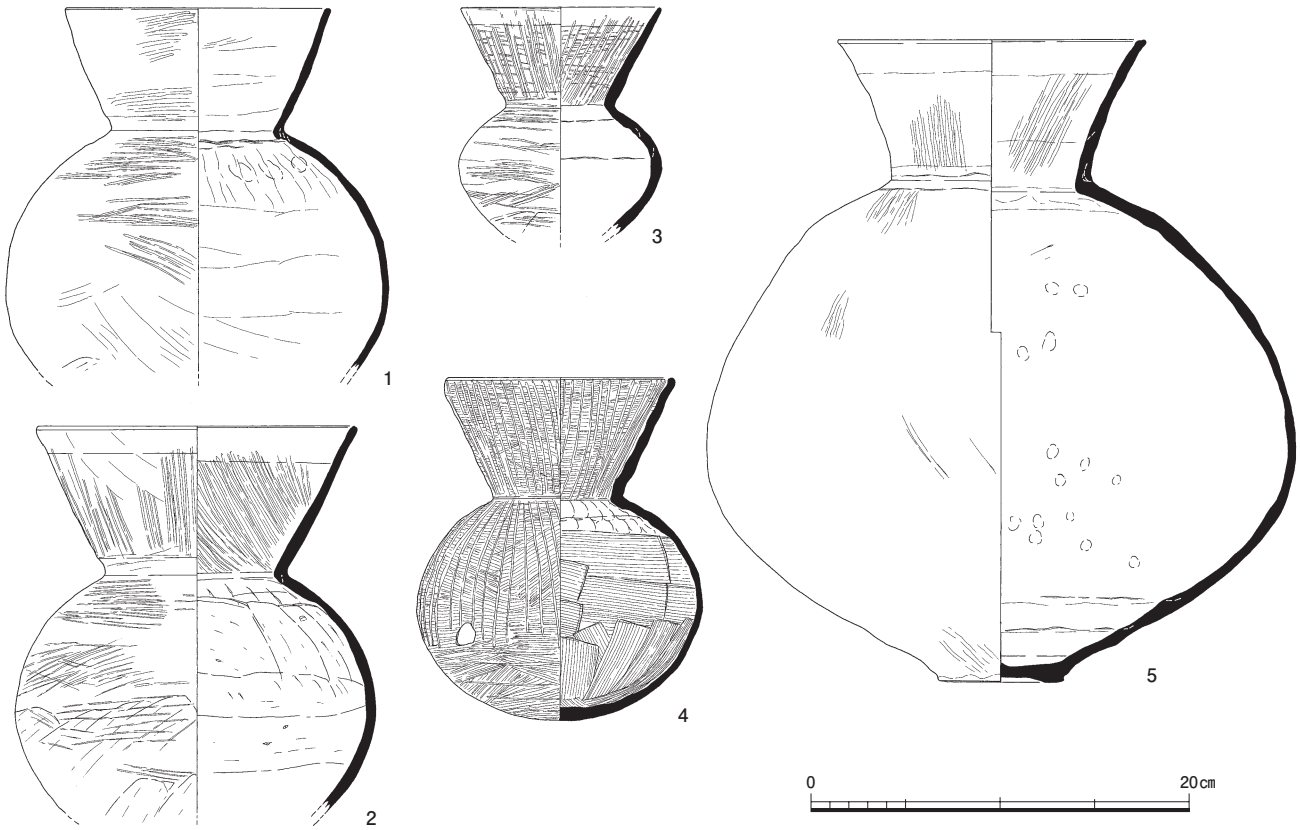

図161　和田廃寺SD145出土土器（１）　１：４

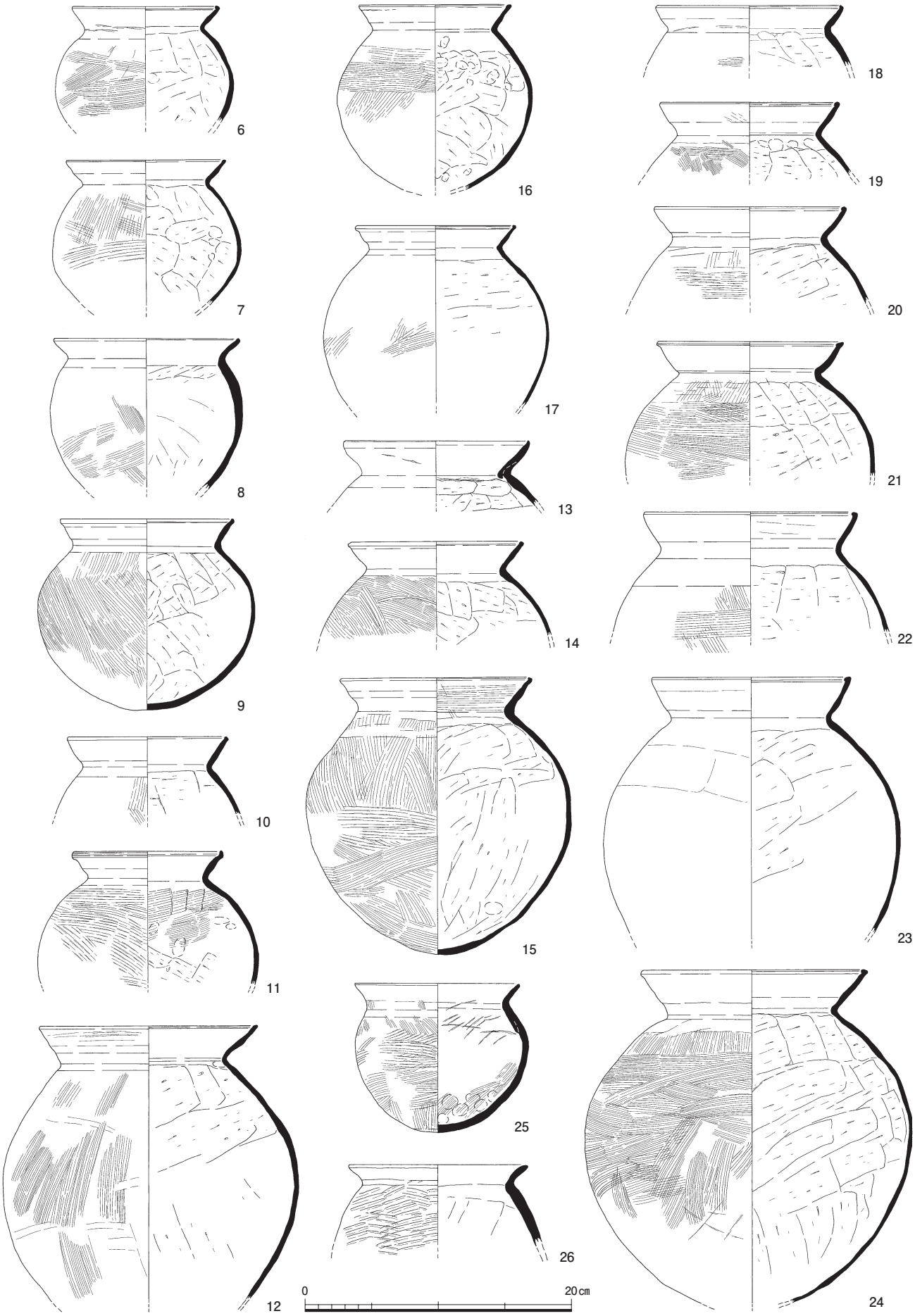

図162　和田廃寺SD145出土土器（2）　1：4

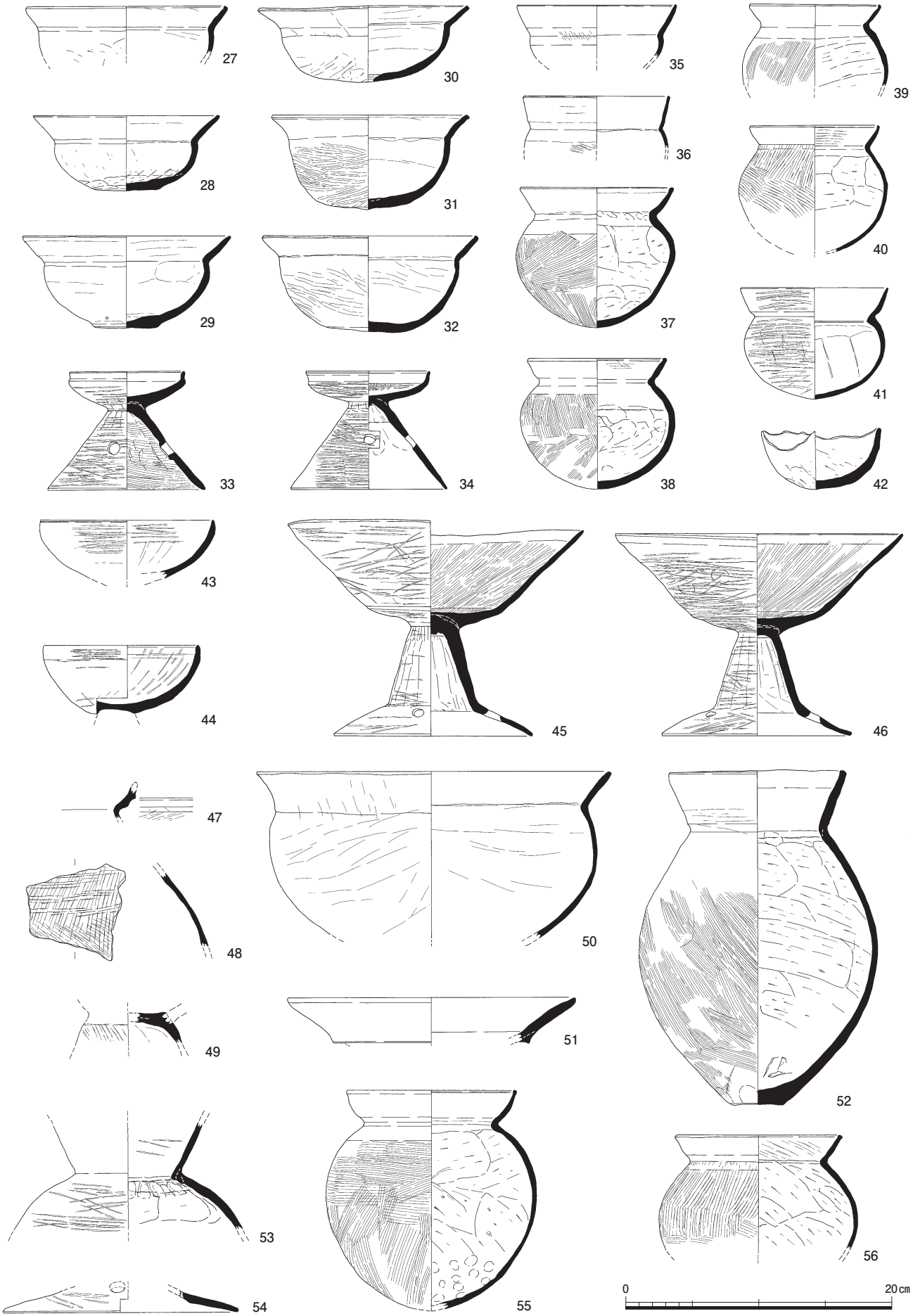

図163　和田廃寺SD145出土土器（3）　1：4

平底である。外面は太筋縦方向のヘラミガキを施し、Ｖ様式土器の製作技法によるものである（以下、「Ａ系統」とする）。胎土は赤褐色を呈し、多くのSD145出土土器とは色調が異なる。

甕形土器　甕形土器には、布留形甕（６～24・55・56）、小型甕（25）、Ｖ様式形甕（26）が存在する。

布留形甕は、法量から小型品（６～10・16・55・56）、中型品～大型品（11～15・17～24）に区分される。中型品～大型品については、全形があきらかなもの以外は峻別が難しい。布留形甕には、「布留傾向（形）甕」、「甕Ｃ」[3]とされた全面ハケ調整を志向する庄内形甕も含む。

典型的な布留形甕は、肩部に横方向のハケを施し、口縁部～頸部内外面には回転性のある横方向のナデを施す（16・18～24・55）。また、底部丸底で底部外面の縦方向のハケ調整が上半部のハケ調整より後出するものがある（16・24・55）。これらについては、底部の最終ハケ調整にともない、土器を反転し内面から保持した際に付着した指関節の圧痕が広範囲に認められる。

それに対し、布留傾向形甕は、肩部に縦方向のハケや断続的な斜め方向のハケが帯状に巡り、口縁部内外面には単位が不明瞭なヨコナデを施す（７～15・56）。口縁部内面には、庄内形甕と同様に横方向の粗いハケを施すものもある（15）。また、底部は尖底気味となり、内面の指関節の圧痕はわずかな範囲となる（９・15）。

布留形甕に肩部施文を施すものはわずかであり、14にはヘラ描き状の弧線が認められるが、通有の肩部施文とは言い難い。口縁部の形状は内湾するもの（10・12・14・17～24）のほか、外反気味に伸びるもの（８・９・11・15）も存在する。口縁端部の形状は、端部を摘み上げやや内側へ倒すもの（ｅ１手法[4]：９・10・14・15・18）、わずかに内側へ巻き込むもの（ｅ２手法：６・16・17・19・20・22・24）が多く、肥厚し内傾させるもの（ｇ手法：21・23）もわずかに存在する。

25は小型甕であり、内面はハケ調整で器壁は厚い。

小型器種　小型器種には、小型丸底壺（35～41）、小型丸底鉢（27～32）、小型器台（33・34）が存在する。

小型丸底壺（35～41）は、いずれも口縁部径に対して器高が高い壺形を呈する。35～40は、体部外面にハケ調整を施し、内面はヘラケズリにより仕上げ、口縁部は強い横方向のナデを施す。布留形甕と同様の製作技法であるハケ・ナデ・ヘラケズリにより製作された小型丸底壺であり、近年、「Ⅱ群」[5]、「Ｃ系統」[6]として区分されているものである（以下、「Ｃ系統」とする。）。これらは、布留形甕の小型品と形態が近いが、口縁部径と体部最大径が近いものを小型丸底壺として区別した。中には、布留傾向形甕の特徴を備えるものも存在する（38・40）。

一方、41は精良な胎土を持ち、外面に細筋横方向のヘラミガキ施す（Ｂ系統）。

小型丸底鉢（27～32）は、「く」の字に屈曲する口縁部をもつものである（小型丸底鉢ａ）。当資料では、未実測資料を含めて有段口縁部をもつもの（小型丸底鉢ｂ）は存在しないという特徴がある。27など一部の個体には体部外面にススが付着し煮沸に用いられている。

28～32はわずかな平底を有するもので、28・30は平底の底部外面をヘラケズリにより丸底化するものである。30の底面には、錐状工具により内面からの回転穿孔を施す。27～30は内外面に粗いナデ調整を施すものである。31・32の外面は、太筋の横方向～斜め方向のヘラミガキを施す。これらの製作技法は、Ｖ様式土器の製作技法によるものである（Ａ系統）。

小型器台（33・34）は、円錐形の裾部に浅いⅢ状の受部を持つものである（小型器台ｂ）。裾頂部を包み込み受け部を接合する裾頂部の凸面接合による。透孔は三方向に施す。受部と裾部付近は１次調整でヘラケズリによる面取りをおこなう。外面は細筋横方向のヘラミガキを施し、胎土は精良である（Ｂ系統）。33は裾部内面に横方向のハケ、34は裾部内面にナデ調整を施す。いずれも受部内面は直径２～３㎜の粒状剥離が多数認められ、供膳に際しての使用痕と考えられる。

なお、破片資料も含め中空で受部、体部、裾部の区分が明瞭なもの（小型器台ａ）や、中空で円錐状の受部と裾部を合わせたＸ字形のもの（小型器台ｃ）は存在しない。

高杯形土器　高杯形土器には、椀形高杯（43・44・54）、有稜高杯（45・46）が存在する。

椀形高杯（43・44）は半球形の杯部を呈する。外面は細筋横方向のヘラミガキ、内面は放射状の細筋ヘラミガキを施す（Ｂ系統）。44は脚頂部凸面接合による剥離面が観察される。54は低脚の裾部で、注記等は不明であるが、43と胎土・色調が一致し、同一袋で保管されていたことから同一個体の可能性が高い。

有稜高杯（45・46）は、水平な杯底部から稜を持ち屈曲し、外上方へ直線的に伸びる杯部をもつものである。外面は杯部外面に細筋横方向のヘラミガキを施し、杯部内面は細筋放射状のヘラミガキを施す（B系統）。脚柱部外面は、１次調整で面取りを施した後、裾部にかけて横方向のヘラミガキを施す。脚柱部内面はヘラ状工具によるヘラケズリまたは棒状工具により平滑化をおこなう。いずれも脚頂部凸面接合によるもので、剥離した脚頂部にはヘラ状工具による放射状のキザミ目が認められる。

その他　その他の器種としては、椀（42）、鉢（50）、製塩土器（52）が存在する。また、搬入土器として、二重口縁壺（51）、Ｓ字形甕（47～49）が認められる。

椀（42）はヘラケズリにより仕上げる粗製品で、口縁部は無調整で打ち欠く。鉢（50）は内外面ナデ調整によるもので、「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。52は甕形の製塩土器である。和泉南部地域の製塩遺跡で出土が認められ、製塩土器の一器種を示す。奈良盆地内でも当該期の集落遺跡では散見する。

51は胎土に結晶片岩を含み、器形からも阿波地域からの搬入土器とみられる二重口縁壺である。また、47～49は、Ｓ字形甕の口縁部、肩部、脚台部の各破片である。東海地域のものであり、頸部から脚台部にかけて粗いハケを施し、胎土からも搬入土器とみられる。

４　若干の検討

数量の把握　未実測分を含めたSD145出土土器全量を対象に、口縁部などの端部、脚柱部および脚台部のある土器を１個体とみなし、数量の把握をおこなった（表22）。

SD145出土土器の総個体数は75点で、壺形土器10点（13.3%）、甕形土器34点（45.3%）、小型器種18点（24.0%）、高杯形土器５点（6.7%）、その他３点（4.0%）となる。器種構成としては甕形土器が多く、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての一般的な器種構成と共通する。その一方で、壺形土器に対し、小型器種や高杯形土器の構成比率が高く、供膳具の割合が貯蔵具に対して高い特徴がある。このことは、遺構の性格やまとめて廃棄された出土状況と関わるものと考えられる。さらに、壺や小型器種にススや使用痕が観察できる個体が多いことも、出土状況を考えるうえで興味深い。

また、搬入土器の割合は３点（4.0%）と低い。東海地方の土器が多いという搬入土器の傾向は一致するものの、大和盆地東南部の纒向遺跡では搬入土器の割合が15%を示しており[7]、当資料の構成比率とは異なる。

編年的位置づけ　SD145出土土器はこれまでいくつかの先行研究で触れられてきた[8]。中でも、寺沢薫氏によりその編年的位置づけが言及されており、「未公表であるが布留０式期の良好な資料であり」[9]、「布留０式に新旧があり将来は細分されて…和田廃寺下層遺跡資料は…その新段階に相当する可能性がある」[10] とされてきた。そこで当資料の編年的位置づけを再び検討する。

器種構成や型式学的特徴を整理すると以下の特徴が挙げられる。①壺形土器は、直口壺のみで構成される。②甕形土器は、布留形甕が大半を占め、布留傾向形甕も多く存在する。口縁部の形態は内湾気味にのびるものが多く、端部形状はｅ手法のものが多数を占める。③小型器種では、Ｂ系統およびＣ系統の小型丸底壺が存在する。また、「く」の字に屈曲する口縁部をもつ小型丸底鉢ａが存在するが、有段口縁部をもつ小型丸底鉢ｂは存在しない。小型器台はＢ系統の小型器台ｂのみが存在し、小型器台ａや小型器台ｃは存在しない。④高杯形土器は、有稜高杯および椀形高杯が存在する。有稜高杯の杯部は深く、杯部径の縮小は認められない。

当資料は、布留形甕の存在と、Ｂ系統の小型丸底壺の存在とその型式学的特徴から布留０式期に位置づけられ

表22　SD145出土土器の器種組成

器種	個体数	比率（%）	細分器種	個体数	比率（%）
壺形土器	10	13.3	直口壺	10	13.3
甕形土器	34	45.3	布留形甕	21	28.0
			布留傾向形甕	10	13.3
			Ｖ様式形甕	1	1.3
			小型甕	2	2.7
小型器種	18	24.0	小型丸底壺	7	9.3
			小型丸底鉢ａ	7	9.3
			小型器台ｂ	4	5.3
高杯形土器	5	6.7	有稜高杯	2	2.7
			椀形高杯	3	4.0
その他	3	4.0	鉢	1	1.3
			椀	1	1.3
			土製支脚	1	1.3
製塩土器	2	2.7	甕形製塩土器	2	2.7
搬入土器	3	4.0	Ｓ字形甕	2	2.7
			二重口縁壺	1	1.3
総数				75	100.0

※端部片により個体数算出（SD145の可能性がある４点も含む）。

る。さらに、小型丸底鉢ａが出現し、小型器台ｂが普遍的に存在しており、布留形甕の口縁部が内湾し、口縁端部の形状にわずかにｇ手法が存在する。以上の点より、SD145出土土器は布留０式の中でも新相に比定できる。

こうした一括資料は、大和盆地内部でも近年増加しつつあり、箸墓古墳周辺SF01、SX01下層～上層[11]、纒向遺跡（102次）SK104[12]、柳本遺跡四ノ坪土坑７上層[13]、保津・宮古遺跡（第３次）SD103・104[14]、伴堂東遺跡SK1080[15]、乙木・佐保ノ庄遺跡SD03下層[16] の各出土資料が挙げられる。

一方、纒向遺跡巻野内坂田地区溝３・４[17]、太田遺跡第３トレンチ溝11[18] の各出土資料では、小型丸底鉢ｂの存在や、布留形甕の口縁端部でのｇ手法の多用、小型丸底壺の口縁部の伸長など、上記の資料とは異なる特徴が認められる。遺跡の土器様相差も考慮する必要があるが、これらの特徴からより新しい様相（布留１式古相）を示す資料として位置づけることができるだろう。

５　おわりに

以上のような検討の結果、SD145出土土器は布留０式の新相を示す良好な一括資料であることが判明した。周辺では藤原京右京十一条二坊・三坊において、ほぼ同時期の土器が出土した遺構が検出されており[19]、同時期の遺構が周囲にも展開するものとみられる。

出土土器のうち甕形土器は、布留形甕と布留傾向形甕が大多数を占める。布留傾向形甕の出土は大和東南部地域と比較しても多く、大和盆地内での様相差や土器製作基盤の有無を反映している可能性がうかがえる。

また、小型器種においては、小型丸底壺および小型器台ｂに小型丸底鉢ａが加わり、小型精製三種の祖形といえる三器種が出そろった段階であるといえる。さらに、製作技術からは、Ａ系統、Ｂ系統およびＣ系統の三系統が混在する状況を示し、これ以後、各系統の混淆により小型器台ｃや小型丸底鉢ｂなど新たな器種が生み出される。このため、当資料は小型精製三種定型化の前段階を示す一括資料であるという評価も可能である。

大和地域における当該期の一括資料は近年増加しており、編年区分についても種々の検討が試みられつつある。しかしながら、技術系統および形式規範に基づいた編年研究は未だ不十分であり、布留形甕や小型精製三種の成立過程については、あきらかではないという課題が存在する。こうした現状の編年研究の課題を克服するためにも、当資料が新たな材料を提供できれば幸いである。

（田中元浩／和歌山県教育委員会）

註

１）木下正史「飛鳥地方出土遺物について」『埋蔵文化財技術者交流会第５回研究集会記録』1979。
２）次山　淳「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40-４、考古学研究会、1993。
３）関川尚功「纒向遺跡の古式土師器」『纒向』桜井市教育委員会、1976。
４）寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊）奈良県立橿原考古学研究所、1986。
５）三好　玄「小型丸底土器における製作技術の二系統」『考古学に学ぶⅢ』同志社大学考古学シリーズⅨ、2007。
６）田中元浩「Ⅲ庄内式期の編年」『弥生土器集成と編年−播磨編−』大手前大学史学研究所、2007。
７）関川尚功　前掲註３。
８）木下正史　前掲註１、寺沢　薫　前掲註４、次山　淳　前掲註２、寺沢　薫「第４節布留０式土器の新、古相と二・三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』（奈良県文化財調査報告書第89冊）奈良県立橿原考古学研究所、2003。
９）寺沢　薫　前掲註４。
10）寺沢　薫　前掲註８。
11）奈良県立橿原考古学研究所『箸墓古墳周辺の調査』（奈良県文化財調査報告書第89冊）、2003。
12）奈良県立橿原考古学研究所「纒向遺跡第102次（勝山古墳第１次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1997年度（第２分冊）』1998。
13）青木勘時「大和・柳本古墳群を支えたムラ」『古代「おおやまと」を探る』学生社、2000。
14）奈良県立橿原考古学研究所『保津・宮古遺跡第３次発掘調査報告』（奈良県文化財調査報告書第100集）、2003。
15）奈良県立橿原考古学研究所『伴堂東遺跡』（奈良県立橿原考古学研究所調査報告第80冊）、2002。
16）奈良県立橿原考古学研究所『乙木・佐保庄遺跡』（奈良県立橿原考古学研究所調査報告第92冊）、2005。
17）桜井市教育委員会『纒向遺跡発掘調査報告書』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第28集）、2007。
18）奈良県立橿原考古学研究所「太田遺跡第１次調査発掘調査概報」『奈良県遺跡概報1994年度（第２分冊）』1995。
19）奈良県立橿原考古学研究所『藤原京右京十一条三坊』（奈良県文化財調査報告書第161集）、2013。